

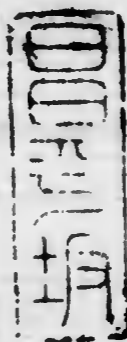
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

紀伊殿

藩鑑

四

庫文閣内	和書
三五九函一 二架	三八冊
三四七八號	



内閣文庫	
番號	和 34682
冊數	278 (6)
函號	159 1

385

藩鑑卷之六目錄

紀伊殿

權大納言源賴宣卿

藩鑑卷之六

紀伊殿

源頼宣卿

權大納言源頼宣卿ハ

東照宮第十のゆきうして内童名を長福
と稱せしれ初り頼將と名のせしまふ
慶長八年十一月二番うして常陸國水戸



城を賜り二十万石を順せしる同九年
五万石の地を加へ賜り同十一年八月由元服
りて従四位中へ叙し常陸公に任じ同
十四年十二月駿河遠征に支國を加へ賜
りて合て五十万石と順せしる同十六年
二月従之後の宰相に叙任し右中將を
兼ね元和二年七月權中納言に任じ同
五年七月紀伊國及び伊勢國松坂を

合せて五十五万五千石を賜り紀州和歌
山の城に移り寛永二年八月従二位權
大納言に昇り寛文七年五月致仕せし
同十一年正月十四日由家七十歳にて逝せ
らる

一 紀州大納言頼宣卿の由世は我四葉以
とき

權規孫内川狩の帝は川を渡らせよと

と意ひらいて子綱をもち世馬は口を取り
馬の左右へ人取付て渡せよと馬よと
ひらかく思ふ心ひらひらと入り氣色こそ
あつたつゝん左右の者へて繋ぐるを
ちや湯洗ひらうて比興なる疥をかきま
放して渡らせよと叱らうとちや其後
を連らひて四尺をうのふ川らうと
ひら飛越よと意ひらひ四番とよ

初りて馬よ繋一時ひらひらと
ひらかされらるる面目かくおひらる
け後ひ作付らるるひらひらと飛越は
飛損して水の中へ飛入けたら細川
こまひらひらひら網を水の底よゆあせ
れける水へ飛入るるちや遊侍の
川よらるる斯のちや幼稚のちや
ゆはななれらるる有つてま

々と宣ひけるより紀伊古卷の物語をう

校合雜記

一 慶長十九年十月朔日、京都板倉伴賀守
勝重より大坂謀叛のより早馬より送進
此日、親世二十席定家の紐解海士の泣
かり檜垣の大事習事を

東照宮より自ら由教成より、さよ付由舞臺
の支度、前宵より松平七重の、大丈正綱に

作付られ、沙子女息、極方も皆由徳の由役人
よして中法成る、其相時雨降り込由舞臺
濡ヤル小を右あつ、大丈下知して拭よせ
板の乾くと待小志、大坂内謀叛より早馬
到来、其状箱をいけ、板倉内、辰正重昌
請取ひ、さうく沙並へ出入を拂ひ、中よハ
上総、分忠輝君、尾張義直君、并頼宣君
河鶴君、其外、内小性、皆之の間へ、のき中に

頼宣君とてうらハ京都より江注進を内前へ
上ルを内允許をく思ふさう只を成され
内障子のこゝろへは内之聞成されし付大坂
内謀叛の次第内膳中上ルを早く内聞成され
し是れ他のゆ兄弟極より内さくは成
されたるをくなり
紀州頼宣御言行録
南光君遺事

一 大坂の陣の時

大坂所極上意は殿極由具足未んまじり

さるうとの由尋よは得とていまへ出まはせり
由より此此次へ由具足尾持系中よつき二條
の内城よをいて

大坂所極由由は殿極へ由具足内をせ極
とてさるうの由よりさるうの内より内着せ中へ成り
せしは内下らに内らさるうの内兵服をその
まゝさるうの内着せ中よの上意に

大坂所極も内軍十人より内ら初極いせん

ゆる由意より小き由具足の方へ

上極由子を入させし由成され小由松子
より申ち教棟へ由らせたり由厨斗
由取無させし由て由祝の上意ちと由産
ゆるよその強し由産るく小儀よ由成る由
しも覺ちまうり紀州家大坂陣覺書

一 大坂由陣のとき由陣取の内由具足より
由より川毎夜寝徳りて以後由らゆて

夜明けハハと由ゆき由産るされゆり右の
松子由下主馬見出へ由るて由方由き
元大形存まうり紀州家大坂陣覺書
紀藩云名書

一 景勝小身よりこれ由津へ後られゆり横田
大學も浪人仕り駿河へ系より小由付城和泉も
資永取持より由年よ達りし由ら抱ら仕り
小由仕り大坂由陣の時南光坊へ大學は
何方より由ら由り由尋成されゆりつるより

付分は出羽へしりて居り

伊新極も大業といふ勇士と思はれし事
化伴頼宣御聞ふ及これ等時ハ常陸外殿
と申すも入りいさる十二歳されも勇智深
き御器量あり有名武功の侍を由布屋の忠
深く御事大業を御抱られ度思ふ板坂ト申
とて柳生但馬と宗範と申言入らる
大業の御事御達政宗へ由身たり但馬と自

分は尋ねやうと尋ね承りしに政宗は此の
大業の人を知らる者か一百万石をうりて堪
いふに我等も望む存りて返答あり奥
あては千五百二十の大將あり度この合戦
勝負し敵城をも攻落し我城をも攻られ
し事數十度あり堪るが武士と政宗御話し
しを但馬と申す語るに齊を所と常陸分
頼宣もや上は御事とて大業を御抱

成り度と内容決りしと安後帯刀直次
等て由所願もあくる由云用と申上りし
常陸公殿内知がよてもた一人よて由座かく名
士勇士を由好く成りしとて古人も稱兵儀
を誠々智勇かぬ伎りし語いし由大将たり

東國太平記

一 夏の由陣は二條の由城也

大御所様

台徳院様尾張様殿様まゝ末彦よむ後法
存まじし由軍評定の時殿様由進み出させし
大御所様(由先よ此由所松作よし時
台徳院様由會様を托いされし
大御所様の由顔を由覽托いされし時
大御所様も
台徳院様の由顔を由洗托いされし
兩上様由機嫌能見させし由得た免角也

由玄い由度ちくし佐渡ちり角く由換授りさ
るゝに付達て由許証候いされしハハキ時
大和所候由候子想て由先ハ由周心成よき
そのちり由証ハ由周心成されふくきこのちり
是に依りゆ子極百由証に置せしれりさし又
合致し及いせしれりさしハ由先ハまさせし
由取うし候いさくくと思らさせしれりさし由從
候いされり子付

台徳院候由玄候いされしハ此上ハ由從次第に
小本むらうと由度り時子佐渡ちりさやうの
通子由換授りよしれり此通り覺ちまうり

紀州家大坂陣覺書 南光君遺事
化州頼宣々言行録 赤邊世聞古

一 大坂内陣四月末に二條内城へ由入成されし月
七日子大坂へ

西郊所候由發向成さる

權現候由跡備安西組永井右近大史直勝

備へ押續き尾張柳井次頼宣君よりいま
残り越小谷の秋なり平野堤より尾張柳井は
中下馬成され兵糧腰付中つひ續く由き
着成されルに付常陸柳井もせき居る中下者
成されし後より中座り中下馬の者小野田
長谷坊豊田文四郎右光のよのなりし
友人一所は居る由先も必定大合戦はあ
るべしかやうよりゆきを續念の事か

つふやまきしを頼宣君由聞友人の者中下
むと思ふ尾張備を素敵大坂へ中押成さる
くと仰らば小松平八郎左衛門等中下ハ功者
よしルる朝比奈忠左衛門より中下守首へ
とあり昂ち忠左衛門と今日先よりしては
必定捨合と積るよの如何と中下成され
中下忠左衛門由返事より今日中下合戦有ま
くは中下よ友人の中下の者は守首忠左衛門

一代之首二つ三つ更なるをしのの了簡いよ
あるへく小代今日先子と後命ききよ後念と
中々替くして跡と續きく也小代祇教千足
尾張柳常陸柳由備の町とく服とすましく
と新越し一筆を頼宣君由覽成され十四歳
と中世も天女の大將をいれ人よ作れ出
小代治に合戦の勝券よ入くするよのあき先
先へ急ぐい先子軍と勝て陣着れりよ

為物を急き家いよとんそりり必定先子軍
是れ陣取よ付とんそりりも也た也つとら
此所作る也た也ついややうとていこれある
ま〜〜小代先子と中合戦は是あま〜〜
と中代先子と赤纒掛る也者尾張柳由
備へ新越し高なるをいれま〜〜中代先子と
尾張柳元駿ききき先へ新越しは纒掛者
也〜新越るをいれい心上代四席内長女

なり馬より白沫をまきぬ衣の出りし折なり
由緒へ参込

大御所様上意出合致始り早く由緒付
遊ばされり先刻北見長六席間宮九段
を由使を巻いされり何とて由進系成されり
との上意より中より頼宣卿聞し
はくをさしそをちんそめりしつと詮なき
評定して進するなりはくをけくし麗

とてせ由馬を由系出りし由人教前後
一つは成て田も沼も論せり大坂より
なる頼宣卿由に乾き由馬より水
くれよと作られしは誰も聞さるもか
を置き単羽織着くら由侍馬柄扱は濁り
水を汲て取上りしを頼宣君由より取上りし
時彼由侍由様の草摺より私に正木次喜

後より浦長門も
入道定瑞も

家人梅原五左衛門中若りて

小能由世見之成されし得くも度まで中よ
此者紀州よて二浦定瑞由茶上り席ら出
されし時服下されし茶臼心の下へ由之成
金の赤板の紋此さく物さく糸向ひ殿よ
何とも遅く由越しや面白き事由度し
つる早く由か付由柄成されし
孩念より小山の上

御祈極由度成されし由對面しへて
ゆき由遊祈の葎由馬より抱もろく
帯刀馬も強く糸ゆと見さく汗の手洗馬
のやうく見えやリ帯刀も馬よりり頼宣
君の由を引茶臼心へよんともるを
板倉内懐正重昌金の抱米月の赤纒
竹杖よてたつきへて帯刀に頼宣君
の由を引内懐を家へ常陸ありとこ

のまじりしと平也に内服も腰を屈り禮儀し

ける
紀州頼宣御言行録
南龍君遺事

一 味方崩の時より事殊炮火つたつはとも
あるやいろいろや内先よりも諸軍勢と見むる
なりけり下紅かたれりともいれども端とむむる
者もゆきよりなりとも進りて早に内ち刀由抜
しと平より者もいれども敵らへもま
者未だ見えざるよと有て由抜成されしと

不いし崩掛るに依て此時内ち刀を抜せ
られ軍勢より内ち刀を抜しは奥者も
かせしと内ち刀を左右へひきよの由より
成されしと内ち刀の前へ崩来りる者も左
右へあされしと内ち刀の崩より長門ちいり
右の先より長刀を持糸付拂除中出雲
も其外内供の者もいれども馬上よりい
中道より者も左右へ分れ崩より

尾張柳屋假押へも又方へも崩れ掛りヤル
 さく續く勢力を不連へし右の鉄炮鳴る
 崩れしのごとく由家込由度しハ別天王寺
 の築地の隙より由度し其時様より帯刀
 出合中より最早由合幾る下中より由度
 念もくごもさくまよりさく茶磨心ハ由度
 成されし帯刀も由供仕紀州家大坂陣覺書
紀藩秘録
 一 茶磨心より大勢つくるヤルを假柳押分

押分由より成されしハ板倉内膳心の水腹よ
 居中され見まうて豫外早く由越成され
 大御所板倉今由より成されし由遊覧の外
 はよるまきくごの上意より人を拂居中
 されし由小性元二二人より由よりハハハハ
 依り平十郎を始り一人人を連らし由より
 成されしより由茶ハ由出成されし由上云ハ
 合幾るより由侍成されつる今ハハハハ

早くい面白き事を見せ成さるべき
ととの由事なり殿様由清子由情あま由
小由度小由先子を見せし中上より一里
由跡は由是成されし事私るれいこと
もも苑中中を花中へき儀は由度
とて大さく由せし花はしれし由乳色
られしに時の上意

上様由思ふ違成されし其方う道理なり

由意成されし由くを松させし由
由同く由度よりさく由咽かき
由度りて由上器より由湯を造せし
是は由上器より由辞退成されし
くさるる系より違て上意由度
由湯由よりかされし由退出の時
湯茶へ出す今日の殿様の由松子
後不為き由機嫌の由松子と承り

あり 武邊世聞書 武家閑談
武道閑書 校合雜記

一 巾着年の時分芳野へ巾着山りりて花と
巾着山りりて花と
巾着山りりて花と
巾着山りりて花と
巾着山りりて花と
巾着山りりて花と
巾着山りりて花と
巾着山りりて花と
巾着山りりて花と
巾着山りりて花と

濱田道迪

不憶廬山雨 為君湛百花

頼宣卿

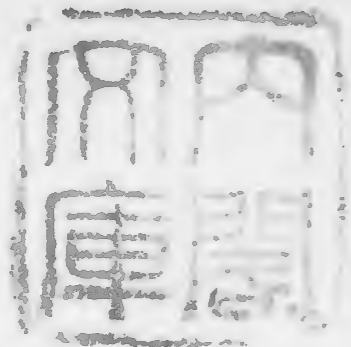
堪斟盤谷水 對客喫新茶

肥州頼宣卿言行録

一 頼宣卿巾着年の頃なりし其時分ハ
之花た進將監宗茂細川宰相忠興へ入道
之并真田伴兵衛信幸伴達中納言政宗かと
皆古老の勇士なり毎度内家むくの事
とも申成りし細川之并帰國の由暇下され
西國へ由りの茶渡邊一學直綱義之助に
之并一學へ申されし紀伊國柳本虚堂の

墨蹟不動軒の由掛軸かく天下の名物に
てり

権規振より由津願と承りう及び門津見
は度念願より薄も是より歩る中此
度帰國りり少ハ松光の我等より最早系
府も不定より卒彼墨蹟津見政度より
中されり少ハ一學帰りて頼宣くけ合中上
山得い易き事と作れり限を由松之舟と



由數寄屋へ由松請成され彼虚堂の墨蹟
は由掛成されも清拙の墨蹟と由中成され
り由茶の湯由中茶より由茶を點せり少
さく之舟へ作れり此の虚堂の墨蹟由後由不
定より安き由事と中今口下請りとも
其掛軸はけ方へ持系致されり少ハ
今口由由ありらるる存一虚堂を由目小
掛(ま)と備中造小近頃致念りり作らる

二舟も重て洋見はるへ〜と申されし其
後由書院より後〜と申御記もたつり申て
二舟由帰りの付に渡邊一學かの虚堂は
掛軸を持せ出〜學に由書院と白書院と
向席下松戸際〜虚堂の掛軸を取出し
箱の蓋をひげのけ共よ〜重て畏り居て
二舟由通りの時由は上の水申されしは
二舟もつ〜と申す一學申は先日の由に

よ〜此掛軸由既成され〜と申す由重て
の内糸府不定と思ふとの由詞をいま〜と
存せし重て御後由糸府に〜しやう
い〜と申されあ〜と虚堂を由目〜掛し
小ま〜近付由息災〜と申す由目よ
か〜のよう〜と申されしは〜と申す
はよ〜と申されしは〜と申す由深志の由
よ〜と申す由糸府の由よ〜と申す

内公入也礼中書一々々々上内賢意の
如く裁廢も毛府仕重て洋見仕一々々
い々々一榮一對一也礼の儀何分も考方
より中上流れも感涙を押一か々退出
あり聖年二二升毛府も彼處堂を内掛
二升を内掛請内茶湯成されり二升取
内口上とも是なりト
紀州賴宣卿言行録
南枕君遺幸

一内年若の時伴達政宗由出大酒宴ふて

帰られ也を由度か々々由喉乞成され也ハハ
曲もさぐり由之成され也して内送る由一々々
賴宣々の由子を取て引去る賴宣々政宗
の由を取一内程由投成さる政宗ハ一々々
扱られいひひ一々大笑一々退出せしり

同上

一紀伊大納言賴宣卿由若年の頃柳思に
かかいら内事一々々由側廻の内由服さる

菊々み々赤せ々し小由事らり〜子由附
家老安後常刀承るや存登城由案内む
由前へつ〜系うあふよ〜由袴の上よりあ
由膝の改をきつ〜と押へま〜〜兼て
大カるれにわ〜も由さ〜らき成なること
あ〜せ〜は〜継の外由い〜み袴い〜れ〜
由事〜も他るは直次〜よけるい志〜の
袴い〜れ方承知ま〜りもやうは袴い〜るほと

石調法由度り〜あせま拙者へ作せら〜れ
由自りよ由赤袴い〜れ由儀由不持の由事よ
由度り中、其通りの由事〜もい五十万石
由大もちい成され難〜く由る由嗜袴い〜る〜
小由承知袴い〜れは〜り〜由腹を切らせま〜る
と〜よ由いやま〜り成なるの所作を承り
由と〜る〜〜よ〜子由袴由、袖ともよ〜
ま〜り〜る〜も〜史の〜も〜も〜由服の改應〜

をくせりけりよ光年ノ頃由水枯れされ
ゆよ右由何さ湯を由かゆせさるるに
由痛も枯れされゆあくの由事一由遊習の者
伺ひ侍りよまもい子細のりる事るる遊て
聞とく一由意其後由吐よば底い帯刀々
形見あり此底なぐいみ十萬石いたれつま
生涯はいらさのかとるめあり由湯を引せ
れりよ由意けりよよ由度よ侍りよ人々皆

感涙を流しけること 雜話藻垣草技書

一 大小性同宮久保宗科もて頼宣君由叱成
されし由奪野由帰り時分由通う成されか
由叱りて由入小跡もて久保古振りよ小志うり
由覽成され久保いれをちうり嘲りし八幡
大井道さると作られ百て由返り成されし
久保もたの子よて昭光を鞘かき由次へ
ちけ頸をのり殺出小由腰めよて抜および

一歩に由成敗成たる由に圖書替りの由勝れ
をよ血刀をい清更頼宣君の顔色に眼よ
血をよきくろくろくよに遊習はく非道
皆に中よよの由意あり皆に怒れぬこの
をく皆一同よ由む千万と中よよその中
高井仔細一人に昔に顔色よ改をい
て在出よを由見よめまをくよよよ
我道理よ承伏よくよよ顔に尤よ

思に顔ありよ由同造成たる由仔細
り久に罪科勿論よよに由成敗の所由尤
至極存まよ由尤に誰よありよ作付られ
由成敗成たるよよ由事よ尤よ由武將の由
よよよよに幾場よよに由自身の中よ下れ
由所勿論よよよ生の由時よ官中納言
位候よ位よ至よ流よ由よよよ由中討極
され小事

禁裏へ對しきり由之禮内不我是るる事
小たて由家運の末と存まうり中と中と
涙をもちくく流し勿奔るま由事と中
上りハ頼宣君も道理と造り奥へ入せざる
後伴織をられ汝の先刺中亦道理を
自今より付堅致まうくり中誓約に
まより由一付中付なり
紀州頼宣卿言行録
南光君遺事

一 紀伴大納言頼宣卿ハ幼き時より

東照宮の内藤十のかりて文武の内務
を聞ふ尋常の質よかちまうりも係を納
給ふ事も垂くをり或時腰帯とりハ
備前長光の刀よりまげさを試み給り
狭く切りてまうりたるを突給ひられハ
二つより倒れりたる一同驚入るる
かり大に悦び北波道圓ハ異國よもか
利劍もあるや又かくのまうりる人ヤ

作らうくは道圖承りて異國より就衆大
河の中利劔も是らう小人を殺して樂む人
夏桀王殷紂王と中惡王がうきまき
凡人を害して面白まきおろし禽獸の
志をいそし人間をいそし口をよめて罪人
を教中の種多きをいそしと憚る所を
いそしつと入路ひのぬて道圖を以て
先よ中つる不こそ正極の道理を是より

身じ自試るよりつるまきと陳言こそ之
を之もも淺くわく賞受らうりり

常山紀談

一或時大高原友あつとり士司る事よ就て
らやまらうらうはまきいそし怒り流して吾不
幸よりまき士持するわくの事も忘る
成る志る人々の事まらうらうと道圖
聞て已う目のくくして人のよらうと見
明らりたるをい替りて人のまきいら

事とや外概古系も新系もよき人を
 擇み出さんか智者も勇士もいふ徳も有き
 心入まきとい目のたつらむかうと立言一
 けををつくりとけせ法い道理を極せうと
 て其之感せし法くまきの詞を悔たまひ
 けりとも道圓常は其る法うて乱世は
 居士君の爲に死さるるやう太平の世練て
 死さるるを忘るへくまきと戒りたり

常山化後
 南龍君遺事

紀州頼宣卿言行録

一 頼宣卿馬を系法い旅の中より邸中へ
 風を召けるを申す取てまき鞍を系法
 けりとも古見在法なりとも者松野を寺
 とも者法うたり折席頼宣々馬場に
 かりける時をるは熱き席分て殿は未
 馬上に練法いりよといけき頼宣々細
 いよと尋法い熱き席さん小

東照宮の街道一番の馬上の内名人と
やまうらむと取らり小田原陣の時心道
を武者押してこそせ流る丹羽長重
長谷川秀一堀秀政率筋を押しけり
東照宮の印旗を見と皆さうり一花を
観るこそ一つの谷川の細橋りつ此橋へは
かりける人々橋下を皆流りも
東照宮馬上より橋際へ走せ給ひり

二人の大將さむる馬上の達人の細橋を
渡さるを見よと云らりける馬より下り
流る由馬の橋より遙の上をに付四人
あり引渡しける人々見にいふと云るに
彼二人の大將大に感し馬上より達人
といふと云へり馬上の達人は危き
事いせぬものなり殊は大事の軍を前に
危すの事あるれがくかき事よと感し

くるといふと承り候へり申すに頼宣は
つくと聞て大に悦び千詞を書て硯箱に
入れらるるまゝ赤田権助といふ士或時
頼宣にへまけるに今朝一人思ふせるもの
ゆいゝ大將の一言に重きものなりまゝ
千金も人の命をかく者ならんまゝに
大將の一言よりして忽ち命を露塵と
も惜まらば存せざるも昔よりのもよ

中はまゝの詞をて時服をいへ
賜ひり同

一 江戸表より或時尾張殿紀伊國殿由方へ
内見の儀見たり其節頼宣にへり由方
内伝かり申渡りて申出舎の候邊へり付
義直に安後節のへり申すに別は用事
よてもまゝ申すに邊を通り申すに
あり其方へ申すに申すのよと申すに

面談より及りまると仰るれ由之成されしを今
がし由侍控されし下されしやうよと申上
常刀に頼宣々の内側へ系り尾張殿より
中侍兼成されしや由侍り成さるへしと仰
らしゆを今がしと申上ゆよつき由侍由座
控されし只今由殿殿候と申て由親き方
と申し尾張候と申るま由座小不ふしは候
かとも由侍せ控されしやうある儀は由座に
し

このまじりやと申上りし由心得しと申上り
由は包らるれ由對面相済尾張殿由侍以後
頼宣々より由撥をとりへし仁を由候と
先ほと尾張殿由出の節我等遅く候と
常刀除外志うらふるとき我等泣涙せし
病を定めて鏡ようつらふまじりへし其
方に見ゆやと申尋よし由意のゆく由泣
控されし由顔色の由鏡ようつらふされし

見上ヤ小丸尾張柳の儀とい中かろし居り
ある帯刀ヤよれやうと私式の者の心よも
存りト中よれに頼宣に中分威されしを方
かといよいさやうと推量よまといありふし付
て尋らると先祀帯刀の我等といふはせざる
わくの儀を誰ありといふ者といはれふにこれ
かといのやうなる事をもよはせ兼まき
者と思はれ我等へ内附にされし下されし

内心入の祀者といまは合をうと

権規極の内事をおひ出へ貴とて法渡

せしと内中分威されしなり

駿河土産
君臣言行録

一或軍法者服免の籍より出へては込一分
判の金子を並へ入るるを軍法籍と名つけ
て指しより頼宣君由覽あされしとてもく
重寶なる道具ありとて中納りあされしと
炬火を幾あもくりと上中族もつらわれも

内賞既成されりわくもの足上り小室の君の由信
作内用と心得り或時光貞君へ軍法
精炬火を由見せりて内笑がされ一國の大
將しる方みて服免の鞘みかくくう入る
金子も分判り用は之へまら毛ハ小身者
劣者かろう持へき事らうたいまらし時
よはよるへきるれとも義経のこ草心と練れ
けることと道中の在家とも火をうけて

其のうりめて大軍を押し大炬火を勝る
そのなり軍法精も炬火か我見て
復は之をといへもやうよいも重ねて
器を指へて指するそのを重寶よあり
顔みて居るも大将の心得るうと作れり

とあり
紀州頼宣卿言行録
南菴君遺事

一 今村小左衛門中兼勘若内勝の爲に
内家中儒士の知りの内をらよるうと

考中よる由家老番改奉引を初として
由僉議有て由意よはさのみ是きて家中
の諸士勝ふりてみ中る友と小名指中りり
由何是行へまこと由身こ浦長門もと始の
由むと中上大方相究りたへ加納久麻直
在由の由意よはわかやうくの事云付へく
ありふまあるたむと中よ付付りまへく
作付らる時よ久麻直の改を振て申

勿辨るま事よしり必く由之用成さうく
由と由止中り頼宣ん何と有(ま)やと共ん
由身のとま長門も取らうしを指中よわう
よ成されゆも若くくまと中よるを時加納
久麻直の長門も向い其方其實由た
存しまうゆと誓詞をえしと中り長門も
赤面され云言よて由一應辨りけしは
頼宣君由賢察これあり重し僉議まへ

と作らば内使を由之奥へ内入内使を以て
以後の儀不迷惑仕らる由止候されしと作ら
され翌日五席たすの直恒を不其方中事
至極よつき此度の儀相止るよし其方に
異見とあるものいふ道理を申しと我
々まねをさる家の大人は此日のやうは顔の
皮をむくやうあるもの申されしものと作
られけり 同上

一 内勝の不如意にて家中知ら四つ物成の
上を内借成されし時新事 儉約仕へ
と作渡されしゆへも人馬の減かの御法が
諸士迷惑仕らる人馬減かの儀作付られ
ゆへと奉行より申す作付られし人馬は
そまき持造へ去出目して勝との儀に
きんむの事あるもこじ内使の奢を
仕る(き)為とあるもの人馬を持ゆ(き)奢

たくかひ人も成まて二年目より赦免者へ
 と作出されし時今二年去まらばよけれり由
 勝り能くしやよ由意よに二年と定くるや
 も違ふへくも子細に明日も公裁ルん侍
 輕まても一命を輕んし柄次第より加恩
 度員方へしと知する時諸人長く上米
 二年より由免かへもたまへらん
 諸人存りてし和もせよと大事と取決ふ

可なり條を云い天道よとむくあり春夏秋
 冬々の節紅花黄葉の次第天の條かへ天の
 下よ生る人倫何と天道と替らんやと作れ
 上米由免わりたり 同上



[Faint, illegible text on the left page]

[Faint, illegible text on the right page]

